

体育理論の授業実践における 多様な関わり方「する・みる・支える・知る」の意識付け —実生活での実践に向けて—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 白須紗衣

1. はじめに

近年の学校保健体育科においては、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成するための指導と評価を行うことが求められている。しかし、平成20(2008)年告示中学校学習指導要領では、現在の子どもたちについて、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向にあることや、子どもの体力について低下傾向には歯止めがかかっているものの、体力水準が高かった頃と比較すると、依然として低い状況が見られることが報告されている。そのことに関連して、平成28(2016)年中央教育審議会(答申)では、体育については、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、「運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、『する・みる・支える』に『知る』を加え、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図る。」とした。加えて、平成29(2017)年告示中学校学習指導要領は、「『する・みる・支える・知る』といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の育成に向けて、運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の充実はもとより、他の領域や保健領域でも知識を基盤とした学習の充実が必要である。」と示した。

体育分野は「A. 体づくり運動」から「H. 体育理論」までの8の領域で構成されている。その中の領域「H. 体育理論」は「豊かなスポーツライフの実現に向けた知識を身につけるための学習をする場である」と示されている。しかし、山元ら(2015)によると、体育理論を

受講した、または過去に受講してきた学生の体育理論に対する学習意欲と学習内容の理解度の低さが指摘されている。また、佐藤(2015)は学校現場で実施する際の問題として、年間計画上の位置付けはあるが、中学校では実施していない学校もあることや、実施している教員の中でも内容の取り扱い方や評価方法等に苦慮している実態もあると述べている。

2. 研究の目的

スポーツには「する・みる・支える・知る」といった多様な関わり方があることを知ることは、学習指導要領で示されているとおり生涯豊かなスポーツライフを実現するために必要な視点である。参与観察より、実習校の生徒は体育の授業にとっても積極的に取り組んでいる様子が見られた。しかし「する」ことには一生懸命であっても、お互いの活動を見合う・教え合うという様子はなかなか見られない。特に見学者はただ授業の様子を見ているだけになってしまっており、授業最後の学習カードの記述が進んでいない様子も見られた。その様子も踏まえ、「する」こと以外にも関わるができるということを伝えることで、見学者はもちろん生徒間での教え合いなどを通じた技能の獲得など成功体験を味わうことにつながると考えた。

そこで、体育理論の授業の中で「する・みる・支える・知る」(以下、本稿では「4観点」とする)を常に提示し、各時間の学習内容と結び付けることによって意識付けを図ることを本研究の目的とした。また、その意識を座学の授業内容から体育の実技領域や実生活へと発展

させて考えさせることで体育の授業やクラスメイトとの関わり方が多様なものになることを期待した。

3. 方法

- (1) 先行研究の調査
- (2) 実習校での参与観察
- (3) 実習校（第3学年）での授業実践（全3時間）
- (4) 授業記録（授業撮影データ、ワークシートの記述内容）の分析

4. 分析のための評価の観点

4 観点の意識付けの状況を見取るために研究としての評価の観点を設けることとした。なお、成績には一切関係のない評価である。毎時間ワークシート（学習のまとめ部分）の記述を評価分類し、全体の分布や個人の変化の様子を分析結果に用いた。

【研究としての評価】

A+：「する・みる・支える・知る」を体育の授業や日々の生活など今の自分に結び付けることができている

A：授業内容を踏まえスポーツへの多様な関わり方を考えている
「する・みる・支える・知る」の言葉を用いて書いている

B：授業で学んだこと感じたことを書いている

4 観点が意識付いたかどうかを評価したいため、授業を受けるにつれてAとA+の評価に値する生徒が増えることを期待した。

5. 授業実践について

(1) 授業実践の概要

- ①対象 山梨県内公立中学校
- ②実習期間 6月～10月（週1～2回）
- ③授業対象 第3学年 1学級（35名）
- ④授業期間 2020年9月24日～10月8日

(2) 実践単元について

- ①単元名 H. 体育理論
「文化としてのスポーツ」

②単元の目標

- ・文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする。（知識及び技能）
- ・文化としてのスポーツの意義について、自己の課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。（思考力、判断力、表現力等）
- ・文化としてのスポーツの意義について、課題を解決するための活動などを通して、学習に自主的に取り組むことができるようにする。（学びに向かう力、人間性等）

③4 観点との結び付けについて

毎時間単元内容の学習に加え多様な関わり方「する・みる・支える・知る」の言葉を導入部において黒板に提示（図1）・再認識させたうえで授業を展開した。意識付けのベースを作るため掲示する際は必ず図の順番に並べるよう心掛けた。



図1 掲示物

(3) 単元計画

全3時間の単元計画を次のとおり立案した（表1）。

表1 単元の学習計画

時	主な学習内容
1	○スポーツの意義を考えよう ・スポーツの文化的意義 ・スポーツの推進について ・もしこの世からスポーツがなくなったら自分の生活はどうなるか 【スポーツの意義を踏まえて、日々の運動や体育の授業にどのように取り組んでいきたいか考える】
2	○国際的なスポーツ大会の役割を知り、自分にできることを考えよう ・国際的なスポーツ大会やオリンピックの役割

	・国際的なスポーツ大会のよさや魅力 【東京オリンピックへの関わり方、自分にできることは何だろうか考える】
3	○スポーツが持つ、さまざまな違いを超えて人々を結びつける働きを考えよう ・スポーツによる人々の結び付き ・さまざまな違いを超えて行われるスポーツ 【今後のスポーツへの関わり方を考える】

○：本時のねらい 【】：本時のまとめ

① 1時間目「スポーツの文化的意義」

まず授業の導入部にて、スポーツは「する」だけではなくその他にも「みる・支える・知る」という多様な関わり方があるということを再認識させることを重視した。スポーツの文化的意義やスポーツの推進に触れながら現代生活において豊かな人生を送るためにスポーツは大きな役割を担っているということに気付かせるよう授業を構成した。終末部のまとめでは「スポーツの意義を踏まえて日々の運動や体育の授業にどのように取り組んでいきたいか考えよう」という発問を設定しワークシートへの記述を求めた。

② 2時間目「国際的なスポーツ大会とその役割」

オリンピックをはじめとする国際的な大会を取り上げ、大会が行われる理由や大会が行われるよさや魅力について学ぶ授業内容を設定した。授業資料として東京オリンピックのプロモーションビデオの動画を用いることで、国際的な大会への多様な関わり方に気付かせるようにした。本時のまとめとして2021年に開催される予定である東京オリンピックへ自分がどのように関わることができるかを考えさせワークシートへの記述を求めた。

③ 3時間目「人々を結びつけるスポーツ」

民族や国、年齢差や性差、障害の有無等のさまざまな違いを超えて行われるスポーツの事

例を挙げながら、スポーツには人々を結びつける力があることについて考える授業内容を設定した。パラリンピック競技の1つであるシッティングバレーボールの紹介動画などを視聴させることで「みる・知る」へのきっかけづくりとなるよう工夫を行った。3時間のまとめとして自分自身が今後どのようにスポーツと関わっていけるかを考えさせる問いをまとめの記述に設定し、ワークシートへの記述を求めた。

6. 4観点の価値及び効果

1時間目の授業の導入部において、今までどのようにスポーツに関わってきたか中学校生活を振り返りワークシートに回答する時間を設けた。生徒の回答として1番多かったものは体育の授業であった。2番目は運動部の部活動であり、次いで体育祭の競技という結果であった。「みる」に関する行動であるテレビ中継と回答した生徒も2人いたが、生徒の大半が「する」ことに関する項目を挙げていた(図2)。続いて展開部において、スポーツの関わり方として大きく分けて「する・みる・支える・知る」があることを全体に提示し再度考えるよう促した。すると、テレビ中継で試合観戦をした、ニュース・新聞をみて試合結果や選手のことを知った、オリンピックの競技種目をインターネットで調べたなどの意見が多く挙げられた(図3)。4観点を与えたことが、日常生活の中の何気ない行動でもスポーツへの大切な関わり方のひとつであるということに気付くきっかけになったと考える。

図3にも記されているように、4観点を認知してからみられる生徒の反応は、日々の身近な行動かつ生涯にわたって実践できる行動が多い。4観点を示す価値や効果としては、生涯にわたってスポーツに親しむ方法を見つけるきっかけを与えることができると言える。以後、各時間における生徒の反応及び評価の分布を述べていく。

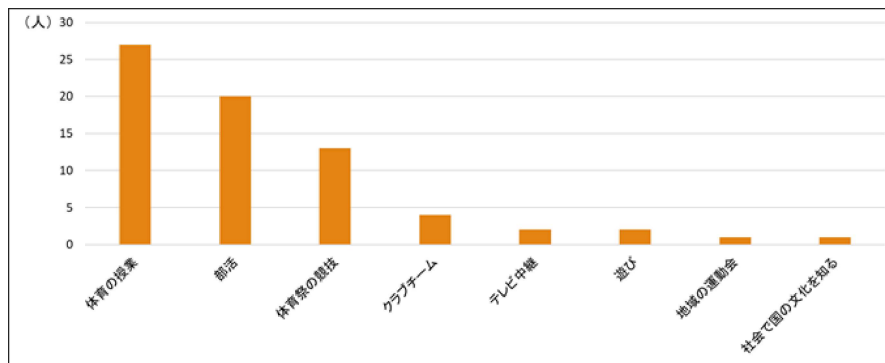


図2 自分自身のスポーツとの関わり

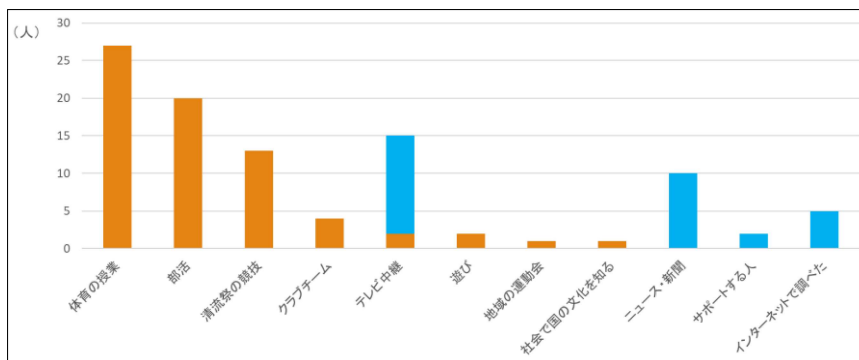


図3 自分自身のスポーツとの関わり (再考)

7. 結果と考察

(1) 1時間目

「スポーツの意義を踏まえて日々の運動や体育の授業にどのように取り組んでいきたいか考えよう」というまとめの問いに対する記述の評価はA+が4人、Aが12人、Bが15人であった(図4)。4観点に基づいた多様な関わり方について考えまとめることができたA+とAの合計は52%と半数を少し上回った。

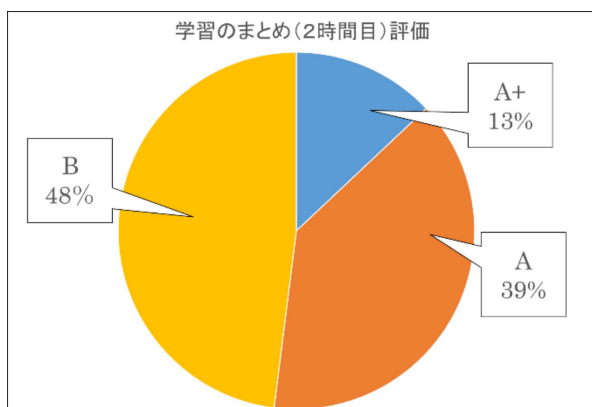


図4 学習のまとめ評価①

各評価の記述内容の一例を右の表に示す(表2)。

表2 各評価別の記述内容例①

評価	生徒の記述
A+	スポーツのメリットについてたくさん知ることができた。スポーツをすることは、苦手だし、あまり好きではないが、見る、支えるなどの観点から関わっていくことも大事だ。体育の授業もただするのではなく、調べたりして理解を深めていきたい。
A	スポーツの関わりは、自分がスポーツをやるだけだと思っていたが、スポーツを見ることや、そのスポーツについて調べることも関係していると知った。今後も自分の好きなスポーツをやる中で、自分がスポーツをできることに感謝していきたい。
B	しっかり動いたりしないと、人にもよるがストレスがたまったり、体が動かなくなってしまうかもしれ

ない。そうならないようにしっかりと運動をして、健康な体を保って、自分の生きがいを見つけないと思いません。

4 観点を提示した最初の授業であったため、「する・みる・支える・知る」の言葉を授業内で多用するよう心掛けた。

A 評価以上の生徒においては、すでに自分が「する」以外の関わり方をしてきたことや、新しい関わり方に気付いたことをはじめ、スポーツに対するとらえ方が前向きなものになっている記述がみられた。一方で、スポーツの文化的意義の一つである健やかな心身にフォーカスしており、それに関する記述にとどまってしまう B 評価に値した生徒も多くみられた。例示した B のように、授業内容に関する内容はまとめられているものの、4 観点への意識が乏しく 4 観点に関するまとめの記述に至らなかった生徒も約半数存在した。

教師が授業内容を説明していた時間が長く、4 観点に関する発言を生徒に考えさせ発言を求めた回数が少なかったことなど、指導において不十分であったことが結果に表れたと考えられる。

(2) 2 時間目

「2021 年東京オリンピックへの関わり方、自分にできることを考えてみよう」というまとめの問いに対する記述の評価は A+ が 2 人、A が 18 人、B が 9 人であり A 以上の評価が 69% となった (図 5)。

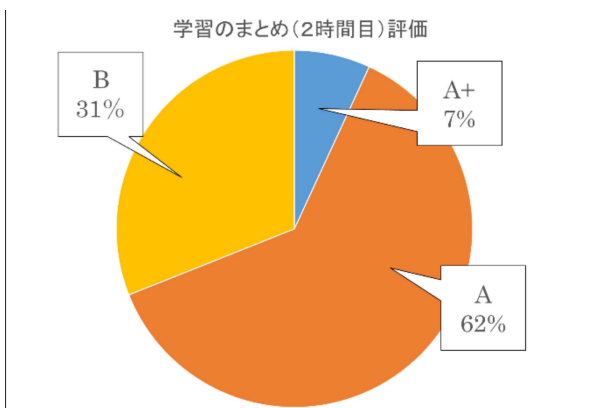


図 5 学習のまとめ評価②

前時と比較して、自分がスポーツを「する」という内容よりも観客はもちろんその他の「支える」立場として試合観戦やボランティアとして参加したいといった内容の考えをまとめる生徒が増加した (表 3)。これは、オリンピックを授業内容のメインとして取り扱ったことによる影響とも考えられる。

表 3 各評価別の記述内容例②

評価	生徒の記述
A+	もう中学の部活は引退してしまっただけで、これから開催されるオリンピックなどを観てさらなる技術の向上につながればいいなと思います。また、他のスポーツを知ること、そのスポーツをやっている人との会話が弾んでいくと思うので、積極的に他のスポーツを知り、交流を深めていきたいです。
A	スポーツの関わり方はする、見るということだけでなく、スポーツを通して外国の人とも交流ができ、それもひとつスポーツを「支える」ということなのかなと感じた。オリンピックは見に行けないけれど、自分のできる交流をできればなと思った。
B	世界各国でまだ差別などがある中、黒人とか白人とか関係なくスポーツとしてフェアプレーで勝負をする機会があるのは素晴らしいと思った。また、こういう貴重な体験を無駄にせず他の国の人と交流したりしたいと思った。

子どもたちにとって、オリンピックをはじめスポーツをする場の規模が大きくなるにつれて「する」ことへの現実味が薄れていくと考えられる。そこで、「する」以外の観点に着目することで何か関わることがないかを考えるきっかけとなり、多様な意見が期待できる。実際の授業でもテレビで観て応援する、同年代で頑張っている選手を知りたい、協賛 T シャツを買って支えたいなど様々な視点からの

意見が出された。

また、今年の授業に限っては2020年に開催予定であった東京オリンピックが延期され、来年の開催を想定して授業を進めることが可能だった。しかし、4年に1度の開催そしてこの先日本での開催がいつになるかわからないとなると、子どもたちが大会自体を身近に感じる事が難しくなることも考えられる。そういったオリンピックイヤーでない時でも、オリンピックに関する動画を教材として用いることや、他の身近な大会を題材に用いるなどの工夫をして、「みる」「支える」など生涯にわたって関わり続けることができる方法に気付かせる授業を展開していきたい題材である。

(3) 3時間目

体育理論全3時間のまとめとして「学んだことをもとに、今後のスポーツへの関わり方を考えよう」というまとめの問いを設定した。その問いに対する記述の評価はA+が8人、Aが15人、Bが9人であり、Bの生徒はまだいるものの、7割以上の生徒が4観点に関連した考えをまとめることができた(図6)。

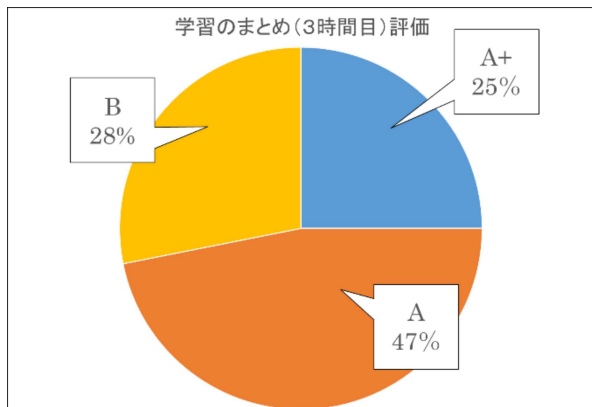


図6 学習のまとめ評価③

生徒の記述例は以下の表のとおりである(表4)。

表4 各評価別の記述内容例③

評価	生徒の記述
A+	「知る」「支える」をスポーツやそれ以外の生活の中でも重視していきたい。知ることで好奇心や感謝の気持ちが自分の中で芽生えたり、支

	えることで環境がよくなったり、さらに楽しめると思う。自ら SNS で調べてみたり、そしてそれをまた誰かに教えたりなど、スポーツを支え、広げていきたいと思う。
A	たくさんのスポーツに触れて、ルールを覚えて実際に挑戦してみたり、テレビやスマホなどで観戦したりしてたくさんの経験をしたい。スポーツにはたくさんの人たちが関わっていて、その人たちのおかげで楽しくスポーツができていことに対しての感謝を忘れないようにしていきたい。
B	日常生活だと、なにかと距離を置いてしまう障害者や外国の人ですが、スポーツなどを通して、交流をもてたり、話をするようになれるからスポーツはなくてはならないものだと思います。

Bの生徒は、授業内容は理解できているものの、4観点に関する記述内容は見られない。A+の生徒は「知る」ことで自分自身に起きる変化や、知ったことをさらに周囲に伝えていきたいという思いが書かれており、授業内容にとどまらない多様な考え方を持つことができている様子を見取ることができる。

実際に体育の授業で取り扱う種目もあるオリンピック競技と比較して、パラリンピック競技は私たちの生活に馴染みのないものが多い。スポーツ種目の中でも普段あまり目にする機会がないものを授業内でビデオ教材として用いることで生徒の興味を引くことをねらった。自分が経験したことのないスポーツのことを「知る」大切さや楽しさを生徒たちが実感することを期待した。動画をみせたシッティングバレーボールと通常バレーボールとの大きな違いは座って競技を行うことであり、障害の有無に関わらず楽しむことが可能な競技の一つである。

- ・すごい
- ・初めて見た

- ・普通のバレーよりも難しそう
- ・実際にやってみたら面白そう

これらは動画を見た生徒の反応である。上記以外にも、他にはどのような競技があるのか知りたい、想像していたものと違ったというような意見も多かった。

今の自分が知らないことがたくさんあることに気付く、初めて知ったことに対して興味を引かれる感覚というものを授業の中で体験できたのではないかと考える。この体験が新しいことを「知る」ことの楽しさや何か自分で調べてみたいという意欲につながるのではないか。

指導の留意点としては、ビデオ教材を用いた場合に、まとめの記述が動画の感想になってしまう可能性が考えられることである。動画が面白かった、興味を持った、という感想文で終わらせないためにも、動画を基にして自

分にできる次の行動を考えさせるなど発問を工夫することを心掛ける必要がある。

(4) 各時間の評価の分布

学習のまとめ評価全3時間分を1つのグラフにまとめた(図7)。Bの評価に値する生徒は1時間目で48%いたが、3時間目では28%にまで減少し、A評価とA+評価に値した生徒は合計で、1時間目が52%であったところ3時間目は72%にまで増加する結果となった。

1時間目ではスポーツは「する」ものという意識が強かった生徒たちが、3時間目では「支える」「知る」という言葉を用いながら自分にできる関わり方を考えている生徒が7割を超えた。また、スポーツという表現からいつもの体育の授業等身近な場面で実践していきたいと述べている生徒もおり、座学での4観点の意識付けにおいては一定の効果がみられた。

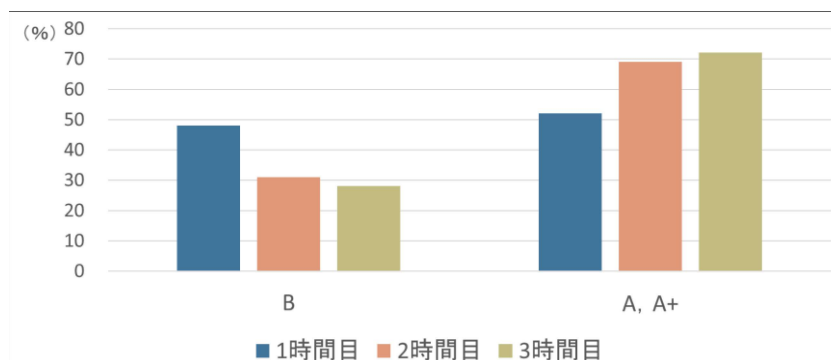


図7 評価の分布

8. 可視化することによる効果

授業後半部分、主にまとめの部分において生徒の意見を4観点に視覚的に振り分ける板書の工夫を行った(図8)。黒板を4分割し、生徒が発言した意見を該当する場所に生徒自身に振り分けさせる。そうすることで、1度「知る」に振り分けられた意見が「支える」にも含まれるなど、1つの意見が複数の観点に当てはまるといった意見が出される様子が見られた。また、意見が出ていない、あるいは少ない観点到に注目して「支える」に当てはまる行動はあるか、など教師側が4観点をもとにした発問をすることが可能になり、4観点に関する意見発表に深まりも見られた。

座学の授業においてこうした板書をするには、他の生徒の意見を聞いたときに自分の考えを改めて見つめ直したり深めていくために重要な働きがあることがわかった。

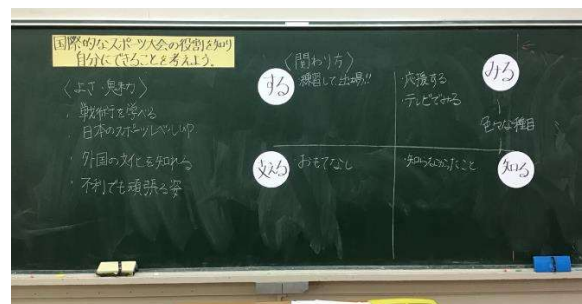


図8 4観点の分布を可視化した板書

9. 全体の考察と今後の課題

今回の研究では、中学生がスポーツへの多様な関わり方を身に付ける手立てとして、体育理論の授業の中で「する・みる・支える・知る」の意識付けを行った。

4つの観点として「する・みる・支える・知る」の言葉を毎時間の授業で提示し、それぞれの授業内容に取り組む中で生徒の発言を4観点到に結び付けていく。それらを黒板上で分類し可視化することによって、より多様な意見を引き出し、ひとつの考えの深まりを期待することができる。以上のことを体育理論の授業で毎時間繰り返し行うことで、まとめの記述に生徒自身の言葉で4観点到に関する行動が書かれるなど、意識付けにおいて一定の効果を確認することができた。

体育理論は「体育分野だが教科書がある座学の授業」という部分で生徒にとっては、つまらないというイメージが先行する背景から受動的な時間になってしまい、教科書上の新たな知識の獲得のみで終わってしまうという側面があった。4観点到を提示することにより、自分の体験を重ねて考えることが可能となり、スポーツとの関わりを自分の身の回りの問題として再認識させる授業を展開することができた。授業内容を踏まえて、自分はどうしていたか、これからどうしていくことができるか等生徒たちの能動的な考えの深まりを導くことができた。

一方で課題として挙げられるのは、4観点到の意識付けが座学の授業での成果にとどまってしまう可能性があることである。自分の考えを文字にして終わらせてしまうのではなく、考えたことや気付いたことを体育の実技授業や日々の生活の中で実践することができてこそ生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための力になる。

以上の成果と課題を基に、本研究の次の段階としては体育理論の授業実践に加えて体育分野「A. 体づくり運動」から「G. ダンス」までの実技領域のいずれかの授業実践を行う必要がある。生徒が体育理論で学び考えた4

観点到を実践することができる授業づくりを検討するとともに、「H. 体育理論」を教育課程上に位置づけられた一単元として取り扱う必要性や可能性といった視點も来年度の研究では探っていきたい。

10. 引用文献

- ・香西庸希・米谷正造・中川麻衣子 (2019). 学校体育における「体育理論」の実態に関する研究—学習指導要領の変遷と研究動向から—. 川崎医療福祉学会誌. Vol. 29. p. 219–229
- ・佐藤豊 (2015). 体育理論領域. 体育科教育学研究. 31 (1) p. 72
- ・佐藤豊・友添秀則 (2011). 楽しい体育理論の授業をつくろう. 第3版. 大修館書店. 東京
- ・村瀬浩二・流川鎌語・三世拓也 (2016). 体育理論の実施状況と実施内容に関する考察. 和歌山大学教育学部紀要. 67 巻 p. 1–5
- ・文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 保健体育編
- ・文部科学省 (2016). 中央教育審議会 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)
- ・文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編
- ・山元秀太・坂本一真・蓑田修治・山田禎郎・則元志郎 (2015). 体育理論領域における課題の検討. 熊本大学教育学部紀要. 64 巻 p. 247–252
- ・Tokyo 2020. 東京2020 イメージ映像「TOKYO 2020 PEOPLE」
(<https://www.youtube.com/watch?v=ALGR6WUoUo&list=PL782fzUwH6A3W0QMpY4cz5RFcwfZrE0Ie&index=22>)
- ・Tokyo 2020. 東京2020 パラリンピック 22 競技紹介：シッティングバレーボール
(https://www.youtube.com/watch?v=auBxKi0tck&list=PL782fzUwH6A20jNga3lCer_E7Hyi54Mai&index=14)